

2017年日本放射化学学会年会・第61回放射化学討論会印象記

佐藤 志彦
Satou Yukihiko

平成29年9月6~8日の日程で茨城県つくば市の筑波大学において、2017年日本放射化学学会年会・第61回放射化学討論会が開催された。本大会は核・放射化学及び関連分野の総合的な議論の場所として毎年秋に実施されており、つくば市での開催は2回目、18年ぶりとなった。

筆者は2011年の長野大会以降、7年連続で参加しており、学生として初めて発表した学会も本大会であることから、とても親しみのある学術発表の場である。本年は発表件数105件中、約半数の48件が学生による発表だった。参加者は142名で、そのうち学生としての登録が59名だったことから、実に80%以上の学生参加者が発表を目的の1つとして参加して下さったことを実行委員の1人でもある筆者は大変嬉しく感じている。

本稿では比較的まだ若手に含まれるであろう筆者が、学生(若手研究者)にとって放射化学討論会がどのような役割を果たしているかという観点から、本大会の印象を記したい。

筆者は若手にとって学会とは2つの効果効能があると考えている。1つ目は自身の研究をまとめて聴衆に届ける練習ができること。2つ目に同世代との交流である。研究成果をまとめて発信することについては言うまでもないが、発表までの準備において研究内容を整理し、学会終了後にやるべきことを明確にすることがその後の研究を進める上で不可欠である。今回も何人かの大学院生が、「早く大学に戻って実験したい」と言っていたのが印象的だった。なお本大会でも毎年恒例の若手研究者を対象にした優秀発表賞の表彰が行われた。まずは本年の受賞者を

列記する。

- 九州大学理学府物理学専攻
修士課程2年 庭瀬暁隆さん
GARIS-II+MRTOFを用いた短寿命核精密質量分析
- 筑波大学数理物質科学研究科物理学専攻
博士前期課程2年 細谷青児さん
加速器質量分析法を用いた ^{90}Sr 測定の試み
- 東北大学 理学研究科 化学専攻
博士課程後期2年 小荒井一真さん
環境からウシの歯の形成時期における ^{90}Sr , ^{137}Cs の移行機構
- 大阪大学大学院理学研究科化学専攻
博士前期課程2年 南部明弘さん
鉄原子へのミュオン捕獲現象の化学状態による影響
- 新潟大学 大学院 自然科学研究科
博士後期課程1年 白井香里さん
Zr, Hf 塩化物の等温クロマトグラフィにおけるカラム通過挙動に対する分子数の影響
- 東京大学大学院総合文化研究科
博士課程2年 小森昌史さん
東京湾底質中の鉄の化学状態を指標とした海水中の溶存酸素量の推定方法に関する研究
- 大阪大学 大学院理学研究科 化学専攻
博士後期課程2年 重河優大さん
 ^{233}U の α 線-電子コインシデンス測定による $^{229\text{m}}\text{Th}$ の内部転換電子観測の試み

タイトルを見ていただければ放射化学会で扱っているテーマからバランス良く受賞者が出ていること



写真1 会場内の様子

がお分かりいただけるだろう。2011年以降、最大のテーマである福島事故関係もあるが、放射化学を代表する分野の核化学、そして新しいところでは加速器関係も見られる。内輪の話だが採点においてはすべての対象者が平等な物差しの上で評価されているため、全分野からバランス良く受賞者を出すような操作はしていない。したがってこれだけ幅広いテーマを扱っていながら、会場にいた多くの審査員の心を揺さぶる質の高い研究が、若手によって行われていると言える。

ところで今回の受賞者の方のうち、何人かはいわゆる常連の方である。常連の受賞者は研究が完成されているという安定感があると共に、毎年聴衆をワクワクさせる期待を裏切らない素晴らしい発表をしてくださっている。もし本稿を読んでいる本大会に参加した若手の方がいるなら、ぜひ次回はエネルギーギッシュな柔軟かつ斬新な若い力を示してもらいたいと思う。一方、公平な審査を期した結果、受賞者の約半数が放射化学会非会員ということになってしまった。会員である若手には更に奮闘していただき、次回こそは表彰状を獲得していただければと思う。

2つ目の学会の役割は同世代の交流である。放射化学会では毎年、大会の折に若手の会を企画している。本年は筆者が代表世話人となり、主要大学には研究室紹介と、その後に親睦会を開催した。多くの場合、若手の会の企画は講師をお呼びし、講義をしていただくことが多かったのだが、本年は世話人の一存で、まずは同じ業界で研究の道を志す仲間を知ろうという趣旨から、研究室紹介をコア企画に据えた。冒頭の大学があまりにも突拍子もないプレゼン



写真2 若手の会参加者の集合写真

をしたことから、それ以降の大学は吹っ切れたように、各々の研究室を語っていただけたようである。その後の親睦会では最初はよそよそしかった他大学との関係も、潤滑油があったせいか、終盤には旧友のようになっている姿も数か所で見受けることができた。

なおこの若手の会については約60名が参加し、そのうち学生は50名だったが、放射化学会の学生会員はそれよりも少ない。学会を発展させるためには会員数を増やすことが重要だが、潜在的な学生会員の候補者が見つかったことは、今後の会員増加への期待が持たれた。

現在、少子化に伴う大学等の教室（講座）の整理に加え、放射化学業界に特有の課題として、RI施設の老朽化に伴う実験の制約等に直面している。その一方で、放射化学という、ある意味、なんでもありの幅広い研究領域融合体のような学会で、多角的な研究発表が行われていることに学際的な研究という観点からも希望は大きい。2011年に発生した福島第一原子力発電所事故では、多くの放射化学会関係者が様々な面で活躍し、改めて放射化学の重要性が認識されたが、近年では113番元素「ニホニウム(Nh)」の命名や、ローレンシウム(Lr)の第1イオン化エネルギー測定に成功するなど、社会的に注目された研究を数多く発信している。このような研究者が集う本大会が、末長く若手の活躍できる場として継続されることを願ってやまない。

((国研)日本原子力研究開発機構
廃炉国際共同研究センター)